

兵庫県の地場産業の紹介



兵庫県の産業は阪神、播磨の二大工業地帯における鉄鋼・造船・機械あるいは化学工業を根幹として発展してきました。しかし一方では、郷土の歴史と伝統に培われ、地域社会と密着した地場産業の産地が県内各地で形成されています。

県内には、5業種（大分類）、約40業種の地場産業が集積しています。特に、清酒、皮革、手延素麺、かばん、線香、釣針などは全国トップシェアを誇り、この他にも、ケミカルシューズや播州織、三木金物（利器工匠具）、淡路瓦などが全国的に著名な産地として知られており、地域における重要な役割を果たしています。

【窯業・土石】

出石焼

概要

(1) 垂仁天皇時代（紀元前29年～西暦70年）に天日槍命が陶土を従えて但馬出石に到来し、衣食住に必要な食器類を焼いたことに始まる。

(2) 昭和55年3月に通商産業大臣から伝統的工芸品に指定。

起源・沿革

出石焼は、垂仁天皇時代（紀元前29年～西暦70年）に天日槍命が陶土を従えて但馬出石に到来し、永住の地と定めて衣食住に必要な食器類を焼いたことに始まったと伝えられている。

出石焼の形成は、天明4年（1784年）に伊豆屋弥左衛門が出石郡細見村に土焼窯を開設したことがきっかけとなった。寛政元年（1789年）に二八屋珍左衛門が出石町谷山の柿谷において白色原石を発見したことが現在の出石焼の基礎となった。

安政期（1854～59）には、当時の著名な染付師鹿児島屋肅平が出石町西位花山に窯を築き優れた作品を作りだした。その作品は現在でも愛陶家の垂涎の的となっている。

明治初年に廃藩置県が行われた際には、士族に職業訓練を行うために佐賀県から陶工柴田善平を招聘し、士族の子弟数十名を集めて伝習させた。次いで県立陶磁器試験場が設立され、石川県から招聘された画工友田安清が白磁彫刻等の美術品の製作を行い、白磁出石焼の名声を高めた。また明治35年米国セントルイスで開催された万国博覧会において出石焼は金賞を受賞し、現在に至るまでこの作品が出石焼の代表作とされている。

昭和55年3月に、通商産業大臣から伝統的工芸品に指定された。

問い合わせ先

出石焼陶友会

住所：〒668-0214 豊岡市出石町内町104-7（但馬國出石観光協会内）

電話：0796-52-4806

FAX：0796-52-4815

事業活動：

- ① 技術開発に関する研究会・講習会の開催
- ② 従事者の親睦を図るための各種レクリエーションの実施
- ③ 新製品「飛谷出石焼」開発事業
 - (ア) 素朴な日用食器等の商品開発
 - (イ) インテリア製品の開発(花瓶、陶版など)
 - (ウ) 飛谷青磁の試作
- ④ PR事業の実施、各種イベントへの出展

丹波立杭焼

概要

- (1) 瀬戸、常滑、信楽、備前、越前とともに日本六古窯のひとつに数えられる。
- (2) 成型は立杭独特の左回転で蹴口クロを用いており、登窯とともに伝統技術を受け継いでいる。
- (3) 昭和53年2月に通商産業大臣より「丹波立杭焼」の名称で国の伝統的工芸品に指定された。

起源・沿革

丹波焼は、瀬戸、常滑、信楽、備前、越前とともに日本六古窯のひとつに数えられ、その発祥は平安時代の終わりから鎌倉時代の初めと言われている。

丹波焼は大別して穴窯時代と登窯時代とに分けられ、桃山末期までの400年間は穴窯が使用されていたが、その後の江戸時代初期以降は現在も使われている朝鮮式半地上の「登窯」に代わった。

登窯は別名「蛇窯」とも呼ばれ、傾斜面を利用して8~9の焼成室が連房式になっている。この中を火が焚き口から斜面に沿って上へ抜けていく直炎式の構造を有する。登窯方式は穴窯方式と比べて火の通りが良く、焼成時間が3分の1程度で済み、量産に適しているなどの利点がある。

近年は連房が4ほどのミニ登窯が多くなっている。先年、丹波立杭窯の作窯技法が国の無形文化財として選択されたのは今日に至るまで使用されている登窯が日本では珍しい古い形式の窯で、その構造を永く記録するためである。

穴窯時代の作品は壺や甕が主で、紐土巻き上げづくりの無釉であったが、登窯の使用とともに”蹴口クロ”づくりとなり、灰釉、赤土部釉、石黒釉等の釉薬も使用されて作品の種類も増加した。江戸時代になって小堀遠州などの指導により、茶器類分野で「遠州丹波」と呼ばれる優れた名品が生み出されて当時の茶人の絶賛を博した。

現在、生産されている主なものは工芸民芸品（花器、茶器、茶碗、食器、装飾品、置物等）及び工業品（植木鉢、酒樽等）である。工芸民芸品は古来からの伝統技法に新鮮美を加え、釘彫り、葉文、印花、流し釉、筒描き、墨流し等の装飾・文様は現在でも行われている。成型は蹴口クロを用いるが、これは立杭独特の左回転で、登窯とともに伝統技術を受け継いでいる。工業品の各種成型には機械口クロや鋳込法を用い、近代的な窯で統一された品物が作られており、益々新機軸を加えつつ産地を挙げて精進している。

阪神・淡路大震災では、大消費地のひとつ神戸・阪神地域の需要が急減したものの、半年程度でほぼ

戻り、現在は概ね震災前の水準を維持している。後継者や高齢化に悩むことの多い地場産業が多い中であって、丹波焼は若年層の円滑な参入により産地の活性化が進んでいる。

なお、昭和 53 年 2 月に通商産業大臣より「丹波立杭焼」の名称で国の伝統的工芸品に指定された。

問い合わせ先

丹波立杭陶磁器協同組合

住所：〒669-2135 篠山市今田町上立杭 3 番地

電話：079-597-2034

FAX：079-597-3232

URL：<https://tanbayaki.com/union/uniongaiyo.html> (外部サイトへリンク)

事業活動：

- ① 坯土工場における陶土の共同生産と組合員への供給
- ② 陶土・釉薬・包装資材の共同購入
- ③ 「陶の郷」における組合員製品の受託販売、作品展示、陶芸教室実施
- ④ 広告宣伝、各種展示会への出展、春ものがたりや陶器祭り開催、製品の共同受注
- ⑤ 研修の実施、助成金の交付等による後継者育成
- ⑥ 例年、東京ドームでテーブルウエア・フェスティバルに参加。知名度の浸透と販路拡大、産地の活性化と丹波立杭焼の一層の浸透を図る
- ⑦ 組合ホームページで産地の全貌と各窯元の紹介や、組合事業の PR を行い、知名度の向上と販路の拡大を図る

粘土瓦

概要

(1) 釉薬を塗布した陶器瓦(釉薬瓦)は、現在、時代にマッチした洋風瓦(平板瓦)を製造しているが、銀色の炭素膜でコーティングされた「いぶし瓦」は良質の粘土と特有の製法により、優雅な高級品として根強い人気を得ている。

起源・沿革

本県における粘土瓦製造の歴史は古く、淡路国分寺(旧三原町)等の発掘調査から奈良時代に始まったと推定されている。

また、明石地方では室町末期に社寺、築城用に作られていた。これが江戸中期に至り、当時の明石城主松平直明が勸業政策のひとつとして採り上げて以来盛んとなり、県下各地で生産されるようになった。現在では、淡路地方を中心として姫路、丹波方面等においても生産されているが、平成 7 年に発生した阪神・淡路大震災の際の「瓦の重さが家屋倒壊の一因となった」とする説の流布によりイメージダウンが甚だしくいまだに尾を引いている。

業界では当時瓦の無償提供キャンペーンやその後テレビ CM の放映、パンフレットの配布などの対策を講じ、平成 12 年には阪神・淡路大震災クラス地震でも崩れない新しい瓦屋根工事方法「ガイドライン工法(耐震工法)」を瓦業界で公表し、イメージ改善に努めながら新商品開発など販路の拡大に努めている。

特に淡路瓦は県内 99%の粘土瓦を製造し、近年の飛躍的な製造技術の向上により寒冷地でも使用が

可能となり、販路の拡大、需要喚起に向け鋭意努力している。

淡路地区

淡路瓦は江戸時代の始めの1610年（慶長15年）に姫路領主池田三左衛門輝政が淡路6万石を拝領し、輝政の三男の忠雄が淡路の領主となり、岩屋城修築と洲本市由良の成ヶ島に由良成山城を築いた。その時、忠雄は播州から播州瓦の名工、清水理兵衛を呼び寄せ城の瓦を焼かせたのが現在の淡路瓦の始まりと言われていています。寛永年間には現在の南あわじ市津井を中心に発展し、明治に入って急速な需要の伸びに支えられ産地を形成した。もともと原料粘土が豊富なおうえに、大消費地（京阪神）への近接性、海上輸送の利便性などが当地発展の要因である。

当地方では、需要の推移に対応して昭和36年頃からトンネル窯による陶器瓦（釉薬瓦）の生産技術を導入し、製造を開始した。これが時代のニーズにマッチし、急速に生産量が増大したが昭和60年頃から建築様式の変化、本物志向等により、いぶし瓦が急速に販売を拡大するにつれて、陶器瓦（釉薬瓦）を製造していた企業も次第と「いぶし瓦」に転換していった。

現在は、銀色の炭素膜でコーティングされた「いぶし瓦」が主力で生産の3分の2を占めている。3分の1は釉薬を塗布した陶器瓦を生産している。「いぶし瓦」は良質の粘土と特有の製法により、優雅な高級品として根強い人気を得て、全国の3割以上を占めている。また、新しく開発された「黒いぶし瓦」や「古代いぶし瓦」は従来の「いぶし瓦」と比べると耐寒性に優れ、変色しない特性や色目が古瓦に近いことから国内では伝統建造物保存地区や古民家再生などに使用され、一般住宅にも広がり始めている。海外では耐寒性と色目が高く評価され中国・台湾の社寺を中心に使用されており、年々輸出が伸びている。また、陶器瓦（釉薬瓦）は時代にマッチした洋風瓦（平板瓦）を製造し、需要をさらに推し進めている。

明石地区

藩主松平直明の勤業政策以降、大きな発展を遂げた明石瓦は従来のいぶし瓦の需要の減少に伴い、昭和12年頃に愛知県三河地方から塩焼瓦の製法を導入し、30年代には最盛期を迎えるに至った。現在では製品の主流が陶器瓦（釉薬瓦）の高級品に移行していたが、押し寄せる波にうち勝てず、現在では粘土瓦製造事業所はなくなった。

問い合わせ先

淡路瓦工業組合

住所：〒656-0332 南あわじ市湊134

電話：0799-38-0570

FAX：0799-37-2030

URL:<http://www.a-kawara.jp/>（外部サイトへリンク）

事業活動：

- ① 粘土瓦製造業に関する指導及び教育事業
 - (ア) 需要動向、技術情報、経営管理情報等を提供、講習会の開催
 - (イ) 組合員、後継者、事業所の管理者などを対象に教育研修等の開催
 - (ウ) 組合員及び関連業界とのネットワークの構築
- ② 粘土製造業に関する情報提供事業
 - 瓦屋根工事の見積に関する積算データの提供
- ③ 粘土瓦製造業に関する調査研究事業
 - (ア) 市場調査に関する事業

原料の仕入状況と価格調査、生産・販売・在庫調査、市況に関する情報の収集と提供、景況と動向、需要予測等情報の収集と提供

(イ) 技術研究に関する事業

地域資源活用新事業展開支援事業、未利用原料の調査並びに有効活用するための研究、新商品及び新形状の研究、技術講習会の開催、視察研修の実施、環境に負担をかけない循環型社会に適応するための産業廃棄物の再活用に関する調査研究、寸法の統一、品質管理に関する研究

④ 組合員の生産する粘土瓦製品の共同宣伝事業及び市場開拓事業

(ア) 淡路瓦を積極的に PR し、需要開拓を図る

(イ) インターネット上での PR 事業の実施

(ウ) パンフレット、カタログ等 PR に必要な印刷物の作成

⑤ 組合員の生産する粘土瓦製品の製造に必要な原料及び消耗品の共同購買事業

組合員が必要とする原料、資材等共同購入し組合員に供給

⑥ 組合員の取り扱う粘土瓦製品等の共同販売

⑦ 組合員の生産する粘土製品の共同検査事業

凍害試験・吸水試験・曲げ強度試験並びに耐風・耐震試験等を実施している。

⑧ 前項の事業のほか、組合員の福利厚生に関する事業

組合員の融和、組合への参加意識、帰属意識、協調性を図る親睦旅行、レクリエーション活動、慶弔、見舞いほか

⑨ その他、前各号の事業に付帯する事業

(ア) 関係諸官庁への陳情、建議他、時代の変化に対応した共同事業の実施

(イ) 建築基準改定による需要の落ち込み、葺き替え需要の減少など

宝殿石（竜山石）

概要

(1) 硬度・粘度が高く加工が容易で、色彩に富み、周囲との調和がとりやすい。

(2) その色合いから青竜石、黄竜石及び赤竜石がある。

起源・沿革

宝殿石とは高砂市宝殿付近から産出する石の総称で、竜山石とも呼ばれる。竜山石という名の由来は、過去に宝殿山に竜の顔に似た岩石があったことによる。

硬度・粘度が高く加工が容易で、色彩に富み、周囲との調和がとりやすい。その色合いから青竜石、黄竜石及び赤竜石がある。

これまで白亜紀(約 1 億年前)の火山活動によって噴出した火山灰が凝固してできた流紋岩質溶結凝灰岩とされてきたが、近年は高砂市の調べにより当時宝殿周辺はカルデラ湖の底に沈んでいたことがわかり、湖底に噴出したマグマが湖水によって急速に冷却、破碎されてできた流紋岩質ハイアロクラスタイト(水冷破碎岩)であったことが判明している。

宝殿石は古代は石棺に使われていたが、江戸時代慶長年間頃から城の石垣や土台石等の建築構造資材として各地に出荷された。天正年間に池田輝政が築城した姫路城にも、竜山石は多量に使用された。その後も大名等特権階級に独占されていたが、宝永 7 年(1710 年)に解禁されて以来広く一般に利用され

るようになった。

明治から昭和初期にかけて、優れた建築資材として国会議事堂、皇居吹上御苑、帝国ホテルその他のビルディング等に活用された。また、耐久性に富むとともに耐酸性が強いことから中国東北部に輸出された。

現在では雑割石を主に板石・延石を産出しており、加工に適した性質を活かして室内への施行にも取り組んでいる。

その他特記事項

- ① 雑割石：奥行き 350mm 内外の四角錐の石で、公園・河川等の石垣に使用される。全生産量の 6 割を占め、大部分が見込み生産である。
- ② 板石：厚さ 20mm 切削仕上げから厚さ 200mm 内外割り肌仕上げまで用途・注文に応じて加工する。
- ③ 延石：公園等の縁石が主な用途で注文により加工する。
- ④ 原石：建築石材が主な用途で板石に加工され壁・土間などに使用される。
- ⑤ 加工：最近の石棺ブームで石棺の製作にも応じている。

問い合わせ先

宝殿石事業協同組合

住所：〒676-0807 高砂市米田町島 763

電話：079-432-3778

FAX：079-432-3778

事業活動：

- ① 県、各市町(土木事務所)へ利用促進の陳情
- ② 近畿地区を中心に設計事務所へ見本石、パンフレットの配付
- ③ 石材販売店等の販路開拓活動
- ④ 石装飾品の製作
- ⑤ 小学生等を対象とした石装飾品製作体験の実施

参考URL

兵庫の地場産業（概説）	http://kdskenkyu.saloon.jp/jibasan.htm
同上（食料品）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs01foo.pdf
同上（繊維）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs02tex.pdf
同上（化学・雑貨）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs03che.pdf
同上（窯業・土石）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs04pot.pdf
同上（機械・金属）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs05mac.pdf
兵庫の伝統的工芸品（概説）	http://kdskenkyu.saloon.jp/tracrafts.htm
